

論 説

温かい眼差しの輪の中で

——学校教育相談の在り方を求めて——

田 邊 昭 雄

【キーワード】 悪魔祓い 温かい眼差しの輪 特別でない特別支援教育 保護因子 リスク因子
インクルーシブ教育 ダイバーシティ ユニバーサルデザイン

1 はじめに

筆者と中村健教授との親交は、日本学校教育相談学会の誕生（1990年2月）と学校教育相談理論化研究会（故大野精一星槿大学大学院教授主宰）の発足（1995年8月）に端を発する。当時、大野は都立高校の教諭で学校における教育相談の在り方を模索していた。その中で、「同じ言葉で自由に議論できる場が欲しい」と常々語っていた。それが上記学会と研究会の発足に繋がっている。その流れの中で、中学校と高校において、それぞれ教育相談の在り方について、同様の試行錯誤を繰り返していた若き日の中村教授と筆者は出会った。

1994年、筆者は千葉県教育委員会長期研修生（生徒指導領域・千葉大学委託研究生）としての生活を1年間過ごすことになるが、その前年度の選考面接の中で「スクールカウンセラー（以後SCと表記）の配置とその学校への定着に関する研究をしたいということだが、そのような不透明なものの研究ではなく、もっと地に足のついた地道な研究をした方が良いのではないか」あるいは「研究計画書の中で『教育相談の資源』という言葉が使用されているが、この資源という言葉の使い方は適切なのか」等、同じ言葉で議論できないもどかしさを味わっていた。

しかし、それでも長期研修生としての研究は行えることになった。当時の「文部省スクールカウンセラー活用調査研究委託事業」（1995年度～2000年度）が、1994年11月の大河内清輝さんいじめ自殺事件など様々な不幸な事件の直接的な結果としてではないにしろ、実施されることとなる直前のことであった。そのような時代から、中村教授とは共に生徒指導・教育相談の道をそれぞれの活動領域の中で志してきた。共同での研究等は無かったが、それはまさに同志としての活動そのものであったといえる。

今回、中村教授の退任とこれまでの業績に対して敬意を表するとともに、寄稿の機会を得たことに感謝する次第である。そこで共に目指した道の今なお途上ではあるが、現在の段階での学校教育相談に関する筆者の思考をまとめる作業を持ってその任に換えたい。

2 悪魔祓いとシャーマン

今振り返れば、筆者は「温かい眼差しの輪」というキーワードの下にずっと活動してきたように思える。資料1にあるように上田の講演や著作と出会ってから今まで、ずっと影響を受け続けながら、学校教育相談という領域の中で活動してきた。そして、同時にその中で培った具体的な支援の技法を社会に還元する活動も行ってきた。

今回は具体的な技法等には触れないので、多少抽象的な論調になるかも知れないが、その点はお許し願いたい。

(1) 悪魔祓いの本質

筆者は、学校教育相談の知見を社会に還元するという意味で、「千葉いのちの電話」¹⁾でのボランティア電話相談員や研修担当者としての活動、市原市社会福祉協議会における20年あまりに及ぶ「傾聴ボランティア養成講座」の講師としての活動、認知症サポーターやゲートキーパー養成講座²⁾での活動などを行ってきた。また、地域に根ざした様々な学会の支部活動としての研修会なども、積極的に推進してきた。それらは全て言い換えれば、上田（1997、2010）の言う悪魔祓いの活動とその活動を主導する悪魔祓い師（シャーマン）を養成するための活動だったともいえる。

つまり、何らかの理由でその所属集団の中で上手くやれずに孤立していく孤独な人が、その集団の中で生きにくくなる。酷く対人関係に支障を来したり、引きこもってしまったり、それが悪魔憑きの本質であり、その悪魔を祓うのが悪魔祓い師である。そして、そのためのイニシエーションが悪魔祓いの儀式なのだという。

例えば、一般市民対象の傾聴ボランティア養成講座で、傾聴の基本を学んだ傾聴ボランティアを養成する。その人たちは傾聴ボランティアのグループに所属し、高齢者施設や病院あるいは個人宅に赴いて、孤独な状況に置かれてしまった人たちに傾聴という技術で対応する。これはまさに悪魔祓い師の養成と那些人たちを中核とした「温かい眼差しの輪」の構築を狙いとしていると言い換えられる。

所属集団から外れてしまった人たちを、もう一度その集団の中に取り込み、さらにはその集団から外れてしまった人たちがもう一度戻るにふさわしい集団の再構築を目指した活動（資料1）だったのである。

(2) 不登校研究の原型としての悪魔祓い

筆者の不登校研究の原型はここにあるとあってよい。学級という集団そして学校という集団から外れてしまった不登校の子どもたち。その子どもたちをもう一度、その集団の輪の中に取り込もうという教育相談活動。それは、筆者たちの示した「不登校への標準対応」（2021）そのものである。学校や学級という場における「温かい眼差しの輪」の構築と再構築という点に焦点づけて考えれば、それは大野（1997）のいう「学校という時空間を耕す作業」であると言い換えることも出来る。

(資料1) 折々の記2013/12/11『温かい眼差しの輪』の中で

私は昨年の『北辰』（本校の生徒会誌）の巻頭言に次のような文章を書きました。少し長くなりますが一部を引用します。

東京工業大学という大学に上田紀行さんという教授がいます。その上田先生は文化人類学という学問が専門です。彼は若い頃に、スリランカで、そこに住む人々と一緒に生活しながら、その人たちの生活そのものを研究材料としてフィールドワークを行いました。彼の初期の著作に『スリランカの悪魔祓い』とか『覚醒のネットワーク』という本があります。その中で「悪魔祓い」という儀式的の意味について書いています。それは現在の日本でも通用する示唆に満ちたものです。

「孤独な人に悪魔がやってくる」悪魔はいろいろな形を借りてやってきます。悪い恐ろしい誘惑が常に皆さんの周りに、そして皆さん自身の心の中にも渦巻いています。そして、その悪魔の誘惑に取り込まれてしまうと、つまり「悪魔憑き」になってしまうと、人は思いもよらぬことをしてしまいます。悪魔の誘惑自体は無くなりませんが、それに取り込まれてしまうかどうかは、その人が周囲の「温かい眼差しの輪」の中に包み込まれているかどうかです。つまり「悪魔祓い」の儀式とは、周囲との絆が切れて孤独になってしまった人を、もう一度周囲の輪の中に「温かい眼差しの輪」の中に迎え入れることに他ならないのです。

これが、私が理解した上田先生の研究成果の一部です。生徒会の仕事は、この「温かい眼差しの輪」をつくることなのかなと私は思います。船橋北高校という社会を、「温かい眼差しの輪」に満ちた社会に、今以上により一層していけるように、やれるところから少しずつ地道に活動していきましょう。

もちろん、これは教員の仕事でもあります。さらに私は生徒の皆さんと地域の皆さんとの間にも同じような関係ができるように努力していきたいと思っています。幸い今年は、皆さんの協力を得て、地元自治会との合同防災訓練や防災シンポジウム、公開授業や公開講演会等多数の方々に学校に来ていただく機会を得ました。そのような活動を通じ学校の良い点も悪い点も見えていただきながら、相互の理解を深め、「温かい眼差しの輪」に満ちた地域社会をつくっていただきたいと思います。

(千葉県立船橋北高等学校ホームページより)

さらに言えばそれは、学校全体で取り組む教育的予防としての「魅力的な学校づくり」を中心とする「未然防止」（生徒指導リーフ、2014）の活動であり、その子どもたちが戻るにふさわしい学級・学校づくりの活動である。そして、不登校状態にある子どもたちとの対応を直接的に担うのが校務分掌としての教育相談係や学級担任、SCやスクールソーシャルワーカー（SSW）という人たちで、これが個別臨床としての相談活動となる。この個別臨床と学校全体で行う予防的な活動の総体が学校教育相談だと言ってよい。

その上で、千葉県高等学校教育研究会教育相談部会では学校とのつながりについて、アメリカの疾病予防センター（CDC）のスクール・コネクティッドネスの概念を参考にして、つながりを強めるための保護因子と弱める影響のあるリスク因子を、表1のようにまとめた（田邊ら、2015）（小澤ら、2021）。

「魅力的な学校づくり」に当たっては、具体的には、学校とのつながりの保護因子となるものを様々な教育活動の中に来るだけ多く取込み、リスク因子となるものを出来るだけ排するという方向で進むことになる。それが、そのまま「学校という時空間を耕す作業」となり、「温かい眼差しの輪」の構築に繋がるものともなるのである。

(3) 地域社会への応用と往還

これらは、まさに前述のような地域コミュニティの再構築の活動と同じである。筆者は実践の中では、学校教育相談の枠組みの中での学校現場での活動から地域コミュニティの問題にかかわ

表1 学校へのつながりの因子

保護因子 (略語)	リスク因子 (略語)
<ul style="list-style-type: none"> • 良い仲間集団 (良仲) • 教員との関わり (教員) • 活躍できる場 (活場) • 帰属意識 (帰属) • 良い習慣 (良習) • 将来への展望 (展望) 	<ul style="list-style-type: none"> • 低学力 (低学) • 対人関係への困難さ (対人) • 社会性の低さ (社会) • 悪い環境設備 (悪環) • 悪い仲間集団 (悪仲) • 学校への低い評価 (低評)

(「いじめ予防と取組む」(2015) 56頁より引用)

るようになり、依頼があれば、学校教育相談の手法を携えてどこにでも行った。その活動は、地域の中で悪魔祓いを実践促進するシャーマン(悪魔祓い師)の育成である。そして、それらをとおした「温かい眼差しの輪」の構築と再構築である。その悪魔祓い師たちの呼び名は、時にボランティア電話相談員であり、時にゲートキーパーであり、あるいは認知症サポーターや傾聴ボランティアということになる。

このような学校教育相談とそこから派生する取組みの広がりには、無自覚的ではあったかも知れないが、理論的な枠組みとしては、すでに大野や上田の研究から得られていたことになる。

学校で様々な問題や課題を抱えた子どもたちとどのように対処していくかは、まさに地域において様々な課題や問題を抱えた人たちとどのように関わっていくかということと全く同義であった。前述の大野の言葉になぞらえるなら「地域という時空間を耕す作業」なのである。そしてそれが「温かい眼差しの輪」の構築ということである。

そして、その地域を耕す作業は、そのまま学校を耕す作業に直結する。それゆえ学習指導要領(2018b, 第1章総則第6款学校運営上の留意事項2家庭や地域社会との連携及び協働と学校間の連携)や生徒指導提要(2010c, 平成22年版第8章「学校と家庭・地域・関係機関との連携」)などにおいても学校と地域の連携は強調されるのである。

3 特別でない特別支援教育

「特別でない特別支援教育」の試みも前項の問題意識と共通する。筆者は教頭として赴任した高校で、文部科学省の「高等学校における発達障害支援モデル事業」を引き受けることとし、その際に京都府立朱雀高等学校の同事業における研究課題に対して共通の問題意識を見出した。それが「発達障害又はその疑いのある生徒も「気になる生徒」の一人として、学校生活に定着させるため、日常の教育活動の中でできる、特別でない「特別支援教育」を探る」(2009, 2010)ということであった。

この「特別でない特別支援教育」を参考として研究課題を次のように設定した。「発達障害を含め特別な支援を必要とする生徒への「きめ細かで丁寧な指導・支援」を行うことが、全ての生徒への学力向上など、有効な指導・支援につながるという視点から、その具体的な指導方法について実践的な検討及び有効な教材の開発を行う。また、成長と共に「生きにくさ」を感じてきた

（資料2） 心の中に平和の砦を築け！

～前略～

国分高校はユネスコスクール加盟校です。ユネスコ憲章前文は「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和の砦を気づかなければならない」と謳っています。この一文は、冒頭の戦争を暴力、いじめ、差別、環境破壊など人類の抱える多くの問題に置き換えてもその普遍性を有します。どうぞ心の中に平和の砦を築いてください

平成29年度千葉県立国分高等学校「入学のしおり」巻頭言より抜粋

生徒に対する個別支援のためのシステムの構築に向けた研究を進める。」(2010a)

この研究課題の中でも、前項までの問題意識や「特別でない特別支援教育」の観点から、個別支援よりも全ての生徒への支援により重きを置く方向性を模索した。現在一般に広く通用している用語で言えば、ユニバーサルデザインと言うことになる。最終報告書にもこの方向性が記載されているが、一方で「すべての生徒」の中でさらに、個別の支援が必要な生徒に対して何をするかという課題が残った」とあるように個別支援の部分を課題として捉えてもいる。このモデル事業の求めているものからすれば、個別支援の部分が課題として提示されることも仕方のないことかも知れない。

しかしながら、個人的には個別支援の部分を課題として捉えるのではなく、「すべての生徒」を対象とするユニバーサルデザインの「その具体的な指導方法について実践的な検討及び有効な教材の開発」の方向でデザイン設計を進め、全体で進める「特別でない特別支援教育」に重点を置いて良かったのではないかと考える。対象となる子どもたちを全体の中に濃厚に包み込む精度を上げる方向性の模索である。なぜならそれこそが、現在のインクルーシブ教育やダイバーシティの考え方に連なるものだからである。

また、それが前項までの言葉を借りるならば、「温かい眼差しの輪」を学校で構築することの一助となり、「学校という時空間を耕す」作業そのものともなるのである。

4 心の中に平和の砦を築く

「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和の砦を築かなければならない」とは、ユネスコ憲章前文の一節である。資料2にもあるとおり、この前文の戦争の部分を、現在人類が抱える多くの課題に置き換えたとしても、この文章は普遍性を持つものである。

この「心の中に平和の砦を築く」ということは、「温かい眼差しの輪」を構築する基本としての心の有り様だと捉えられる。故にユネスコスクール加盟校であるなしにかかわらず、学校に在籍する全期間を通じて、この言葉に絶えず子どもたちを触れさせるように心がけたい。

5 ま と め

現段階で筆者の考える学校教育相談は、ここまで縷々述べてきたことなので繰り返すにはなるが、孤立・孤独のさみしさ故に集団から外れてしまった人を、もう一度その集団の中に迎え入れる営みである。それが学校の中では「学校という時空間を耕す」作業と言うことであり、もっと広く学校そのものも含んだ地域社会に目を向ければ「温かい眼差しの輪」を構築するということになる。

そして、それらを促進するファシリテーターとしての役回りには、学校で言えば教育相談コーディネーター、学級担任、生徒指導主事、SC、SSW など、地域社会では傾聴ボランティアやゲートキーパーなど様々な人たちが存在する。それらを象徴的に表現したのが悪魔祓いの師であり、その人たちの地域社会での活動そのものが悪魔祓いの儀式なのである。

悪魔祓いの儀式などと言うとかなり仰々しいが、学校で言えば保護因子を強くし、リスク因子を弱くするというを常に意識した、授業を含むあらゆる教育活動への取組みそのものなのである。

そうした学校、学級の育成やそこで培われた方法論（技術や技法を含む）の地域社会への展開ということが、地域や学校を耕すという作業であり、「温かい眼差しの輪」の構築ということである。そのような方向性を常に意識した活動を行っていくことが重要である。

（資料3） 折々の記2014／3／31 物事にはすべからく終わりがある

校長の田邊です。今年度末の人事異動で転任となりました。

～中略～

この北斗^(注a)の地での3年間は、十分とはとても言えないと思いますが私なりにいろいろなことができたと思っています。まだまだやりたいことはありましたが、すべからく物事には終わりがあります。残念ながら、船北での私の時間は終わりました。タイムオーバーです。

在校生のみなさん、いつも言ってきたことですが、この北斗の地で「千日の稽古」^(注b)の時を過ごし、「思いやり」のこころを育み、心身の鍛錬に励んでください。せっかく入学した船北です。何としても卒業してください。せっかく出会った先生方や友達です。大事にしてください。高校卒業は社会のスタートラインに立つことです。

ずっと続くように思えた高校生活も必ず終りがやってきます。そしてみなさんが卒業生となったときに、船北の卒業生だと誇りを持って言えるような学校に、みなさん自身の力でして欲しいと思います。何も難しいことはありません。日々の生活を誠実に過ごせばいいだけです。部活動に誠実に取り組む。授業に誠実に向き合う。それだけです。

～後略～

（千葉県立船橋北高等学校ホームページより抜粋）

（注 a） 北斗とは北斗七星のことであるが、船橋北高校は船橋市の北にあり、校章は北極星を型取り、校歌には「北斗の記章（しるし）掲げたる」とあり北斗をイメージした高校である。

（注 b） 「千日の稽古」とは、宮本武蔵の『五輪書』に出てくる「千日の稽古を鍛とし、万日の稽古を練とす」に由来。

6 おわりに

いずれにしても未だ道半ばである。人間一人の時間は限られている。自分の思い望むものに到達することは到底出来ないであろう。しかしながらどこまで来ているか、そしてどの方向に臨むのかを折につけ確認することは重要である。

上述は筆者自身の思いではあるが、中村教授も自身の研究において似たような思いを抱いているのではなかろうかと推察する次第である。

現在の心境によく似た一文を自身の過去の文章中に見つけたので、資料3に提示するとともに、中村教授のこれまでのご苦勞に敬意を表したい。同時にこのような機会をいただいたことに謝意を表する次第である。

注

- 1) 日本いのちの電話連盟のホームページ (https://www.inochinodenwa.org/?page_id=259) によれば、「いのちの電話」は、自殺予防のための世界的な電話相談ボランティア活動である。1953年にロンドンでチャド・バラ牧師が始めた。14歳の少女の自殺がきっかけだったといわれている。今では、この活動の輪は全世界60数カ国に広がっている。

日本では、1971年にドイツ人のルツ・ハットカンプ女史の呼びかけにより東京で始まった。2022年現在、全国で5800人余りの相談員によって50のセンターで24時間体制の電話相談活動を行っている。なお、2021年の相談件数は534,167件となっている。

「千葉いのちの電話」もそのセンターの一つで、1989年10月から相談活動を開始している。

- 2) 認知症サポーターとは、厚生労働省によれば認知症に対する正しい知識と理解を持ち、地域で認知症の人やその家族に対してできる範囲で手助けする人のことである。

また、同じく厚生労働省によればゲートキーパーとは、自殺の危険を示すサインに気づき、適切な対応（悩んでいる人に気づき、声をかけ、話を聞いて、必要な支援につなげ、見守る）を図ることができる人のことで、言わば「命の門番」とも位置付けられる人のことである。

共に前述の「いのちの電話」と並んで、地域社会における問題課題を抱えた人を、同じ市民の手で支援していこうという試みと、そのための支援者の養成を目的としている。その意味では、ピア・サポートの活動であり、「温かい眼差しの輪」の構築の運動の一環ともいえる。

- 3) 特に一般社団法人日本学校教育相談学会千葉県支部、日本学校心理士会千葉支部や一般社団法人日本スクールカウンセリング推進協議会千葉県支部設立の準備活動などである。なお、千葉県高等学校教育研究会教育相談部会の活動も広い目で見れば同様の活動といえる。

参考文献

- 千葉県高等学校長協会生徒指導委員会第1分科会 2012 関係機関との連携に関する研究～生徒指導主事と「教育相談コーディネーター」の役割を中心に
- 千葉県立船橋法典高等学校 2010a 高等学校における発達障害支援モデル事業（平成20・21年度）報告書
- 千葉県立船橋法典高等学校 2011 自己啓発指導重点校の記録
- 林竹二 1978 教えるということ 国土新書
- 一般社団法人日本心理研修センター監修 2018a 公認心理師現任者講習会テキスト 金剛出版
- 国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター 2014 生徒指導リーフ 不登校の予防 Leaf14

- 京都府立朱雀高等学校 2009 平成20年度「高等学校における発達障害支援モデル事業」報告書
 京都・朱雀高校特別支援教育研究チーム 2010b 高校の特別支援教育・はじめの一步 明治図書
 松本俊彦 2021 世界一やさしい依存症入門 河出書房新社
 文部科学省 2010c 生徒指導提要 教育出版
 文部科学省 2018b 高等学校学習指導要領（平成30年告示）
 小野善郎・保坂亨 2012 移行支援としての高校教育 福村出版
 小野善郎・保坂亨 2016 続 移行支援としての高校教育 福村出版
 大野精一 1997 学校教育相談とは何か カウンセリング研究30(2) 日本カウンセリング学会
 大野精一・藤原忠雄 編著 2018c 学校教育相談の理論と実践 あいり出版
 小澤美代子 監修・田邊昭雄 編著 2021 やさしくナビゲート 不登校への標準対応 ほんの森出版
 斎藤環 2019 オープンダイアログがひらく精神医療 日本評論社
 田邊昭雄 1995 高等学校への専任スクール・カウンセラーの導入に関する一考察—生徒と教員にとって、
 より受け入れ易いあり方を求めて— 平成6年度長期研修生報告書 千葉県総合教育センター
 田邊昭雄 2013 『温かい眼差しの輪』の中で 千葉県立船橋北高校ホームページ折々の記
 (https://cms1.chibac.ed.jp/funabashikitah/jo276yons360/?block_id=360&active_action=journal_view_main_detail&post_id=13 2022年11月23日閲覧)
 田邊昭雄 2014 物事にはすべからく終わりがある 千葉県立船橋北高校ホームページ折々の記
 (https://cms1.chiba-c.ed.jp/funabashikita-h/jo8ld7vaq-360/#_360 2022年11月23日閲覧)
 田邊昭雄・富樫春人・高橋閑子 2015 いじめ予防と取り組む～精神保健の視点から～ 千葉県高等学校教育研究会教育相談部会
 田邊昭雄 2016 人は何のために生きるのか 平成27年度進路のしおり 千葉県立国分高等学校
 田邊昭雄 2017 輔導教師に関する台湾研修報告 学校教育相談研究第27号 日本学校教育相談学会
 田邊昭雄 2017 国分生になるみなさんへ 平成29年度入学のしおり 千葉県立国分高等学校
 上田紀行 1997 覚醒のネットワーク 講談社+α文庫
 上田紀行 2010d スリランカの悪魔祓い 講談社文庫
 横光健吾・入江智也・田中恒彦編 2022 代替行動の臨床実践ガイド 北大路書房
 吉松和哉 2001 医者と患者 岩波現代文庫